

講演「授業改革で学校は変わる」～まろやかな風が吹く学校～

講師 枚方市立第四中学校校長 岩谷 誠 様

- 2004 年、校長に就任。当時最年少。強いリーダーシップで赴任した中学校を次々と立て直し、メディアにも取り上げられた。いじめが課題だった中学校では、掃除を全校に広めた。人間関係づくりを重視し、生徒が協働して教えあう「学び愛」、個に合わせた自主学習用「i（あい）プリント」、卒業生の大学ボランティアによる「ご縁塾」、授業でのプロジェクタ活用、「いいとこみつけ」による肯定的評価活動を通知表に記載、ノーチャイムなど、現在では当たり前になっているような取り組みを率先して実施した。
- 今は、教師の「働き方改革」に力を入れている。先生方が疲弊している。枚方四中では、8:30 からすぐ授業。職員打合せはプリント活用と昼に短時間で行う。部活動は週 2 回休み（平日 1 回・土日 1 回）で、平常も決められた時間に終わって生徒を帰す。それでも実績を挙げている。
- 学校生活の 80%を占めるのは授業。だから授業改革を最も重視している。予習すれば授業をよく理解できるようになる。教師が手間をかけすぎる「ごちそう授業」ではなく、教科書を使った「普段着の授業」を心掛けたほうがよい。授業が分かれば不登校が減り、荒れもおさまる。
- デジタル教材の利用は必要感と便利感があるかで判断、そして考える道具として使う。学力とは考える力。子どもの考える時間を奪ってはいけない。例えば、POWER POINT も説明ではなく、生徒が考えた後の解説として使うべき。タイムシフト機能で体育実技を振り返る。知識は自学自習型教材を枚方市で導入。バーコードで解説や定着・応用の別プリントにつがなるようになっている。
- 教育の原点は自得（自分で知る）。与える授業から生徒主体の学習活動に変える。めざす子ども像を全職員で共有できるか。学校全体で取り組んでいる学校はレア。改革はトップダウン、改善はボトムアップで行うようにしたい。生徒のために改革する。学校が良くなれば先生方も幸せになれる。
- 「学びのプロセス」も大切に。子どもをわざと混乱させる「ゆさぶり発問」、ホワイトボードを「ブレゼンくん」と名付け、学習班で協働して発表するアウトプットで学力をつける。「わかる（分・判・解）」「きく（聞・聴・訊）」にしたがって学びは深まる。生徒に劣等感を持たせたくない。勉強が分からなかったら荒れる。
- そのためにも教科書をしっかり活用する。予習を習慣化しようとする時、目標の明確化ができる。授業で個々のつまづきを発見し、個別学習プリント（i プリント）を使った家庭学習と連携できる。
- 「特別の教科 道徳」の実施をにらみ、命の教育「あの世科」を展開している。朝礼で道徳講話をはじめたが、発展させてさまざまな講師を呼んで話してもらっている。ラモス瑠偉氏など著名人も含まれる。道徳は幸せになる時間でないといけない。優秀な子どもとは優しさに秀でた子ども。徳がある子ども。心を耕さないといけない。
- 夢や目標を持たせるキャリア教育に力を入れている。仕事は「志」事。希望を持たせたい。小学校で実施している工場見学や「2分の1成人式」などの取り組みを受ける。中学校では学年ごとに体験活動も取り入れて取り組んでいる。
- 「タテ持ち授業」を実施。全学年の授業をタテ割りして受け持つ。準備に時間がかかるなど大変な所はあるが、教科会での事前打ち合わせが必要となることで、若い先生もコミュニケーションを図れて学べるなどメリットが大きい。
- 行内組織は、校長主導で教科主任がコアとなる「学力向上委員会」を立ち上げた。委員会で授業改

革についての指示を出し、教科会で打合せを重ね、研究授業を実施する等さまざまな取組みをすすめて授業力・教科力の向上を目指す。しくみを作るのが校長の仕事。プランだけだったら「プランプラン」。D o D o とやってみたらいいことがいっぱいあった。主任会・教科部会・学年会も時間割に組み込んで50分間で終わらせる。学活・道徳・総合は学年会で計画する。協働のしくみを作る。

- 文化祭・体育祭は再編して「四中オリンピック」として実施。タテ割り対抗で子どもデザインのTシャツもそろえた。音楽的発表はブロックごとにアイデアを出して実施。グラウンド発表は個人種目をなくして団体種目ばかりにして、賞状をたくさん出して達成感や自己肯定感を高めた。発想の転換が求められる。
- 「A B C Dの原則」。A：あたりまえのことを、B：バカにしないで、C：ちゃんと、D：できる、学校はE（いい）学校になる。学校組織としてできる学校が上がる。やりすぎたら反動もあるが、振り子を振りながらも上昇していかないといけない。

【 質疑応答・振り返りから 】

- 枚方市のラジオに教頭先生が出演。内容の要旨。「今までと違う新しい取組みは先生の負担にならないか？ 大変そう。」という考えもあるだろうが、生徒のため自身に負荷をかけながらも効率よく実践するために努力する。幅広い仕事は飽和状態を超えている。しかし、限られた時間を有効に使いながら、毎日元気よく何事も一所懸命やる。先生が一所懸命だから生徒がよくなる。生徒の成長にやりがいを日々感じる。
- みんなが賛成することはもう古い。校長が時代を先読みして説明して実行すべき。10年たったから普通になっている。「働き方改革」のためには、「教師の仕事ではないこと」「家庭がすべきこと」を校長がはっきり言って、丁寧に説明をしたうえで実行すべき。先入観にとらわれたら何もできない。職員は校長のすべてを見ている。職員は意気を感じてやってくれると信じる。例えば、先生方に5時に帰れる「ハッピーデー」を設け、10人グループごとに順番に帰る日を作っている。
- 学校づくりにかける情熱を感じた。